

『ノーベル賞の国』

文 葛西得男

Text by Tokuo Kasai

「保育」の原点



授賞式にて（右端：スウェーデン王室 シルビア王妃）

去 年も日本の学者がノーベル賞を受賞し、日本の学者の活躍が目立った年でした。

以前、内藤寿七郎国際育児児賞をスウェーデン王室シルビア王妃に差し上げたことがあります。

日本から20名くらいの様々な分野で活躍されている権威ある先生方と同行させて頂き、スウェーデンで授賞式を行いました。

スウェーデン王室は以前から、児童福祉チャリティ活動、高齢者施設の支援にとっても熱心に取り組みされており、その普遍的で献身的な姿勢が受賞対象となりました。

スウェーデン王室はとてもフランクであたたかい心を持った王室である、と夕食会の席で王妃といろいろとお話させて頂いた際に強く感じました。

王妃に内藤賞を差し上げた後、日本側のデリゲーションの中で「一番ノーベル賞に近いといわれている日立製作所役員待遇フェロー小泉英明先生に「脳科学」のお話をさせて頂きました。

小泉先生は国際工学アカデミー連合の副会長でもあり、特に日立のMRIの開発に於いて力をつくされた方なのです。これ

までに数々の脳科学の研究をされ、子供たちの脳の発達における研究の第一人者と言えるでしょう。

私がアフリカの経営に参画していた頃に、東京女子医科大学でアプリカ特別講座「乳児行動発達学講座」を開設したのですが、その際のエグゼクティブ・プロデューサーの一人が小泉先生であり、当時最先端であった子供たちの脳波を調べることができる「光トポグラフィ」を導入して頂き、子供の脳科学の研究にご協力頂き、大変ご尽力を賜りました。

フランスの科学アカデミーではラマダバックという運動が行われているそうです。「手で捏ねたパン」という意味らしいのですが、子供たちに「手を汚して遊ばせる」ことが重要だと推奨しているとのことでした。

我々マザーシップ保育園に於いても、「臨床美術」という分野を取り入れ、子供たちが自由に手を汚して絵を描く時間をつくるよう心がけています。

さらに、小泉先生に伺ったことですが、アメリカのオバマ元大統領が推進されたSTEM(サイエンス・テクノロジー・エンジニアリング・マスマティクス)という教育指針はキンダーガーデンから

12歳までの子供教育の柱としている素晴らしいものです。

そして、小泉先生は年に一度、数多くのノーベル賞受賞者が会員に名を連ねる「バチカンアカデミー」で法王を前に講演されています。今、バチカンはじめ世界では子供たちの脳科学の分野に力を注ぎ、非常に熱心に研究されています。

日本でも世界に通用する子供教育のプログラムを作り、ノーベル賞受賞者も増えていくような環境になれば良いと私は夢見ています。

Profile

1950年12月8日大阪に生まれる。
1972年、追手門学院大学卒業後、米国ボストンカレッジに留学。
1975年に帰国後、アプリカ葛西に入社。営業部、副社長、社長を経て、1996年に社会福祉法人 松福会 理事長に就任。
松福会は社会福祉法人として高齢者介護施設「アプリケア」と認可保育園マザーシップ保育園を運営している。
アプリカ葛西 副社長時代に国連UNEP 環境計画のスペシャルアドバイザーとして子供たちのために地球環境問題を考えるプロジェクトに参画し、世界の賛同者と世界会議、イベント普及活動などを行いながらその人脈などを広げ現在に至る。

